

# Neighbor ⑦

VOL.461 JULY 2012

流動するカタチに想いを込める  
デザインワークスKOMA代表 / 松岡茂樹



かたくなに断わり続けた亀井氏だが、連日の説得に根負けし、ついにこう答える。「わかった。納得するまで一緒に挑戦しよう。たった一度の人生だから、後悔したくないよな」

2007年、新生KOMOAがスタートした。無垢の家具を得意とする松岡氏と、KOMOAを離れた後で収納家具の会社で家具作りの技術を習得した亀井氏。その相乗効果で、ブランドは輝きを増していった。この頃から身体感覚をそのまま反映したかのような松岡氏の刀さばきは、いっそう凄みを増し、多くのバイヤーを魅了することになる。一方、現代アートのギャラリィから依頼を受けるなど、ときと共に人脈も広がってきた。あるイベントで日本を代表するガーデナーの谷野T E A氏と出会ったことも大きい。彼の助言でオリジナル作品への意識が高まったという。最近では、社外の仲間と協力して「純然たる東京のプロダクト」を作る計画も進行している。

「ものづくりを意識的に続けていれば、次の何かとつながることができる。それが、面白いんです。自分の腕がなければ話にならないけれど、次が見えた隣問のスリルが、職人としてのモチベーションにもなる。これからもそのへんを探り続けたいと思っています」。最高の仲間たちと共にリスタートを切って早5年。デザインワークスKOMOAは、新しいスリルを求めて貪欲に走り続ける。



松岡 茂樹 (まつおか・しげき) 氏  
家具職人 / デザインワークスKOMA代表取締役

美術学校を卒業後、日田工芸株式会社(木製家具製造会社)へ入社。3年で親方となり退社。美術学校の親友だった亀井氏と共に、2003年にデザインワークスKOMAを設立する。アーティスト的なデザインと確かな技術によるインテリアが、パイヤーを含め各方面で注目を集めている。  
<http://www.koma.gs/>



「手取り足取りなんて甘い話は、職人の世界にはないんです。技術は盗んでなんぼですし、かんなの具合とか角度とかを懇切にいねいに教えてもらうことを望んでちゃ、いつまでたっても上達しない。自分も親方が帰ってからこっそりかんなの状態をチェックしたもんです。そっうやって腕を磨くしかなかったから」  
その甲斐もあって、松岡氏のスキルは一気に向上。入社3年目には同僚や先輩たちを抜いて、親方の座へ。会社のなかで新しいブランドを立ち上げるほどにまなびました。しかし、その力の源泉となったものは、なんだったのだろうか。  
「根性でしよう(笑)。最初からやらねばなしたかったわけだけれど、根性だけは誰にも負ける気がしなかった」  
しかし、ここから先の物語でも、また違う意味での「根性」を松岡氏は試されることになる。

### 最高の仲間たちともう一度…… 次のスリルを探る新生KOMA

入社当初から「3年で独立しよう」と考えていた松岡氏。これを実践するために、美術学校時代の親友で彫金の道に進んでいた亀井敏裕氏に声をかける。そして、2003年には満を持してデザインワークスKOMAを立ち上げた。

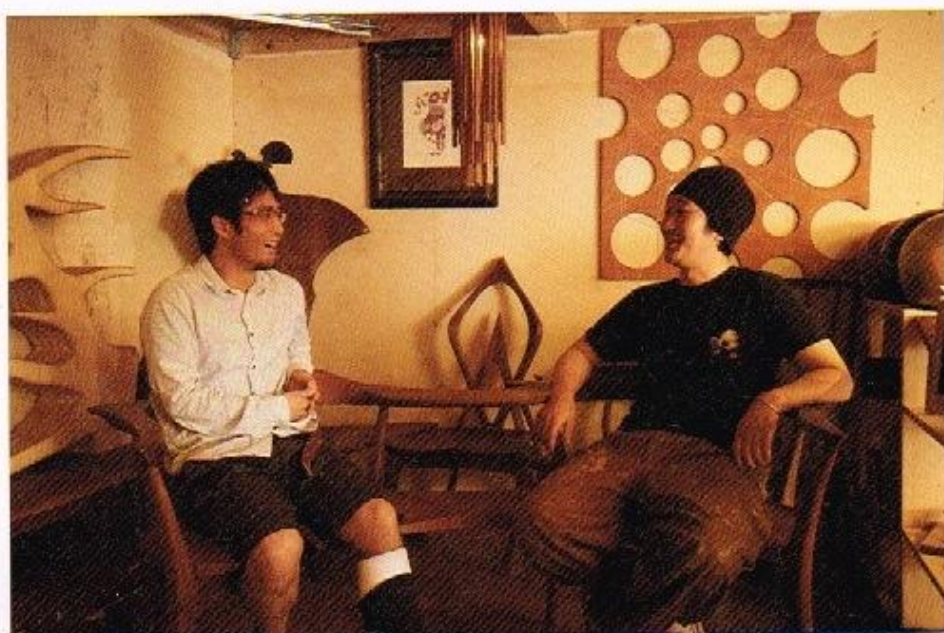
ところが……である。  
「読みが甘かったんです。会社にいた頃の成功は、優秀な営業担当などがいる

組織のなかでのこと。  
「いいものを作っていれば大丈夫」という考えは、作る側の幻想でしかなかった。前途多難な船出だった。経営はつねに火の車で「しまいにガソリンを買う資金さえない」という窮状に追い込まれる。

そして、空中分解の日……。経営のことで、松岡氏と亀井氏は駅の階段で口論となる。もはや日常的なことではあったが、親友ならではの歯に衣着せぬ物言いが、この日はいつも以上に加熱。そして、もみあいのなかで転倒した亀井氏は、救急車で搬送される事態へ……。

当時を振り返って、亀井氏は笑う。  
「別に二人とも行儀のいい方ではなかったし、まだ若かったから、ケンカ自体には問題ない。とはいえ、救急車のなかでは普通に思いましたよね。「あいつとは、金輪際仕事はしないぞ」って(笑)」  
だが松岡氏の想いは違った。

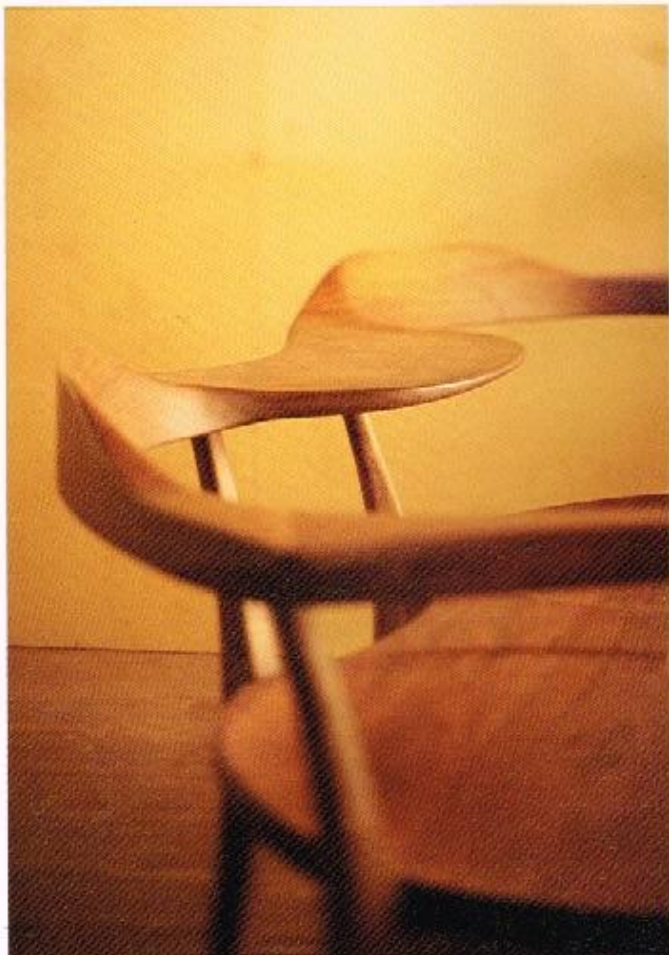
「志だけじゃだめなのがわかった。そこで、なんとか収益を上げられる体質に



KOMAの代表・松岡茂樹氏(右)と亀井敏裕氏(左)。KOMAの工房にて。

して、亀井を呼び戻そうと……。なぜあいつにこだわるのかって？ 亀井は馬鹿がつくほど真っ直ぐで、自分とよく似てるんです(笑)。馬鹿だからとことんやるし、仕事も手を抜かない。それに、あいつと仕事をするとお互いを高め合える感じがあるから」

小さな仕事を形にしながら、ようやく会社の収益体質が変わり始めた頃。松岡氏は、亀井氏を説得するために出かけた。



## ディテールまでこだわり抜く それがKOMMAのものづくり

うねるような曲線を描く独創的なフォルム。それでいて、その造形は絶妙なバランスで調和していた――。

デザインワークスKOMMAが作り出す家具は、一見してそれとわかる個性的な魅力を持つ。しかし、名立たるバイヤーたちが熱い視線を注ぐ理由は、決して個性だけのせいではない。一番の理由は、そのこだわりと完成度にあるという。

家具職人でありKOMMAの代表でもある松岡茂樹氏は語る。

「やることをきっちりこなして、しかもディテールまでこだわり抜く。それが

うちのやり方。もつと言うなら、クオリティーで使う人を驚かせるようなものを作り続けたいんです」

この言葉は、松岡氏が若手に言い続けていることでもある。もちろん、誰よりもこれを実践しているのは、ほかならぬ松岡氏自身だ。なかでも自らがすべての工程を手がけるベンチやチェアでは、彼の仕事ぶりとセンスが遺憾なく発揮されている。

「デザインの性格もあってか、椅子のラインナップについては、『どうやって作るのか?』ってよく聞かれるんです。驚くかもしれないけれど、基本的に図面は描かない。使う人のことをイメージしながら、いきなり木を削り出していくんです。背もたれの感じとか座り具合は数ミリ単位で変わるから、やっぱり使う人のイメージを思い描くことが大切。それとこのときの刃物さばきは、ウチの特徴の一つといえるかもしれませんね」

松岡氏が削り出す曲面に魅せられるバイヤーは多い。しかし、削り出して曲面を作るとはいっても、実はこれも複数の木材をパッチワークのように積層させながらのことである。したがって工程は複雑で、組み合わせる木材同士のバランスも計算に入れて行わなければならない。

「強度を持たせる意味でも、デザインを調和させる意味でも、『木を読む』センスは重要です。うちでもつともこだわっているのも、この部分。微妙な調整

を進めるうちに、必ず『ここ!』ってポイントが出てくる。カンと経験をたよりにこれを探すわけです」

経験とカン。この二つが高いところで結びついて初めて、そのポイントは見つかる。続いては、松岡氏の経験則を形成した修業時代をひも解く。

## 職人魂を叩き込まれた修業時代 遣い上がるのに必要なのは根性

美術学校を卒業してから、最初に就職したのは無垢材を使った家具作りで定評のある老舗の製造会社だった。ここで松岡氏は、職人としての厳しい修業の日々を送った。

「会社へ就職……とはいっても、実情はバリバリの職人の世界だった(笑)」。もちろん頂点は親方。そのふもとに、いわばピラミッド状に職人の世界は広がっていた。

「格付けも、入社時から歴然とありましたからね(笑)。エリートとして期待されて入社する者もいれば、そうじゃない者もある。一番末端で入った自分はよく言われました。『お前はほかの人間の邪魔だけはするなよ』って」。親方衆から「この世界に向かないから、早いところやめちまえ」とドヤされ、人知れず涙を流したことも一度や二度ではない。にもかかわらず……というか、それだからこそ、早朝から工房に詰め、夜は深夜まで残り技術を磨いた。

流動するカタチに想いを込める

デザインワークスKOMA代表

# 松岡茂樹

一度目にしたら忘れられない印象深いカタチの家具たち。  
その製作の全工程を手がけるのが、デザインワークスKOMAだ。  
今回、訪ねたのは家具職人でありKOMAの代表でもある松岡茂樹氏。  
仲間とともに走り続ける彼の職人スピリットを紹介していく。

取材・文 石井 聖枝 写真 亀井 豊

